つながり

95号
2021.12.14
青森県高Ｐ連調査広報委員会
題字：八戸高等学校　諏訪内博彦

青森県高等学校ＰＴＡ連合会事務局
〒030-0113　青森市第二問屋町４丁目11－６　計量検定グループ庁舎内
TEL 017－757－8586　FAX 017－757－8587
E-mail：akp017si@galaxy.ocn.ne.jp

←「高Ｐ連公式ＨＰ」ＱＲコードからアクセス!!
http：//www.aomori-koupren.com/

青森県高Ｐ連進路指導研修会
「高校におけるキャリア教育の取り組みの今」

昨年度はコロナ禍の影響で中止になった本研修会ですが、今年度は無事、開催の運びとなりました。和嶋教育長のご挨拶に続いて「青森キャリア教育応援企業表彰」があり、県内外16の企業・事業所・団体が表彰されました。いずれも高校での出前授業やインターンシップ等を積極的に行い生徒の職業意識の向上に貢献されていることに保護者として大変ありがたく思いました。

応援企業表彰

続いて「高校生の県内定着・還流を促す青森県の取組」と題して県企画調整課の桑嶋麻子氏から情報提供がありました。高校生の県内就職率が全国平均80・８％に対して青森県は55％、東北各県と比べても最下位とのことでした。

その理由として、賃金等の待遇面はもちろんのこと「とにかく地元を離れたい」との都会志向が強く、これらは成長過程で育まれてきたものではないかとの説明でした。県では、保護者や生徒向けの冊子・リーフレット・ＷＥＢによる情報提供・企業や先輩による説明会や交流会・就職支援員の配置・首都圏等大学とのＵＩＪターン促進の連携協定など様々な取り組みを行い青森で暮らすことの利点を発信しているとのことでした。桑嶋氏は「これらを活用して是非、親子で一緒に青森で暮らすこと、働くことについてじっくり話し合ってほしい」とのメッセージで締めくくりました。

そして本研修会の目玉である基調講演が「高校におけるキャリア教育の取り組みの今」と題して、リクルートＥｄ－ｔｅｃｈ総研所長山下真司氏からＷｅｂ形式で行われました。90分の講演でしたが大変中身の濃い、私たち保護者や先生方にとても参考になる内容でした。

講演では予測困難な社会を生きる生徒達の育成について、私たち自身も〝自分ごと〟として捉え、地域や社会そして家庭が連携して子供たちの学びを考えるきっかけやヒントをつかむことだと話されました。驚いたのは日本の会社の寿命が平均18年といわれ、今や定年まで一会社でやり遂げる時代ではなく、これからはキャリアチェンジを意識して、変化への対応力と学び続ける力が必要だというのです。さらに、日本の高校生の多くが他国と比べて自分に自信を持てず国の将来も悲観視している割合が多く、その結果としてどこか「他人事な社会課題」になっていると指摘されました。この危機感から高校では来年度スタートする新学習指導要領で、自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し解決していく、つまり自ら問いを立て、「自分ごと化」することで、他人事な社会課題から脱却し、思考停止しない人間を育成する教育がスタートするとの説明もありました。最後に全国の多くの高校で実践されているキャリア教育の取り組み例をご紹介されました。生徒が「未来社会を創造できる主体」になれるような取り組みがすでに多くの高校で行われていることを知り、保護者としても積極的に子供と対話してキャリア教育の後押しをしたいと感じました。

県の情報提供

最後に、充実した研修会を主催していただいた教育委員会に感謝申し上げて報告を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

（進路対策委員長　三浦　繁子）

歴史に幕

「遥かなる道」～地域とともに歩んだ74年間

青森北高等学校今別校舎

本校は令和4年3月末をもって、74年の長い歴史に幕を閉じます。

昭和23年に青森工業高等学校今別分校として今別小学校に併置され、その後幾多の変遷を経て昭和32年、県に移管し青森県立今別高等学校となりました。青函トンネル工事関係者による人口増等により、昭和48年からは1学年6学級募集となった時もありましたが、人口減少・少子化という時代の流れにより、平成19年には、青森北高等学校今別校舎となりました。これまで、本校に心を寄せ、お力添えくださいました皆さまに、この場をお借りして感謝申し上げます。

閉校式典

学校活動の中で、特にフェンシング部の活躍は輝かしいものがありました。昭和37年の創部以来、青森県内での優勝は数知れず、全国高等学校総合体育大会においても、男子団体優勝2回、男子個人フルーレ優勝1回、女子団体優勝2回と全国的にも強豪校として有名となり、輝かしい結果と数多くの名選手を輩出してきました。また、今別町の郷土芸能である「荒馬」も特徴の一つとなります。平成11年、山形県で行われた全国高等学校総合文化祭の郷土芸能部門に出場し、自主制作ねぷたとともに見事な演舞を披露しました。また、学校の文化祭での町内運行では、地域の方々からたくさんの拍手や声援をいただきました。今年度、最後の今高祭荒馬運行においては、中心校である青森北高等学校の生徒や地域の方々のお手伝いもいただき、盛大に町内運行を実施することができました。生徒達にとって、心に残る良い思い出となりました。

最後に、閉校式での生徒代表挨拶の一節を紹介します。

「学校がなくなっても、私たちにはこの学校で学んだ思い出と経験が残っています。それらを生かし、地域や社会に貢献し、分校時代から数えて74年という長い歴史を持つ、この学校の伝統と功績を後世に伝えていきたいと思います。」

（教頭　白戸　好幸）

閉校を迎えて

黒石商業高等学校

本校は昭和49年に創立されました。当初は、情報処理科・商業デザイン科・事務科・営業科の四学科によるスタートでした。斬新で機能的な制服の採用とともに、商業デザイン科は当時としては目新しく、時代を先取りした学科として話題となりました。現在は、商業科・情報処理科・情報デザイン科の三学科となり、地域の期待に応えるべく、多くの人財を育て、送り出してきましたが、少子化の波には逆らうことができず、黒石高校との統合に伴い、令和4年3月をもって48年間の歴史に幕を閉じることとなりました。

本校では「自戒・慈愛・寛容」という校訓とともに開校以来、唱和されてきた「誓いのことば」があります。

『誓いのことば』

○「自戒・自愛・寛容」を信条とし　自らにきびしく他人の痛みのわかる心豊かな人となるよう　互いにはげましあおう。

○社会の一員としての自己確立のため　一日一日の生活をたいせつに積みあげて　自らの可能性を引き出し学ぶ喜びを創りだそう。

最後の黒商ねぷた

○本校の歴史と伝統は　われわれのみがつくるものであることを自覚し　二度とない青春をたぎらせてこれにあたろう。

黒石商業では、不変の教育理念である「誓いのことば」を生徒が唱和し、実践する教育活動が展開され、現在まで脈々と受け継がれてまいりました。

さて、閉校にあたり、最後の黒商生が「お世話になった地域の皆様に恩返しをしたい。」と取り組んだのが、黒商ねぷたの復活でした。ここ2年間新型コロナウイルス感染症の影響により、様々な活動や行事が制限されてきた生徒たちです。そのような状況下で、ねぷた運行ができたことは、高校時代の思い出が一つ増える機会として貴重な体験となったことと思います。

最後に、これまで黒商生が実践してきた「誓いのことば」の精神が、統合先の新黒石高等学校でも受け継がれていくことを願うとともに、これまで黒商を支え育てていただいた父母教師の会をはじめ、すべての関係各位に対し、心からの敬意と感謝を申し上げます。これまでのご指導、ご支援、誠にありがとうございました。

（校長　工藤　清彦）

「烏城の地に根ざして」

黒石高等学校

本校が位置する黒石市には、かつて黒石陣屋が築かれていた。この陣屋は、17世紀半ば、陸奥国津軽郡（現在の黒石市内町）に築かれた黒石津軽家のもので、城壁が黒かったことから烏城（うじょう）という異名がついていた。南に浅瀬石川が流れ、陣屋との間に宇和堰があったことから、自然の要塞の呈をなし、古くから弘前とともに、津軽地域の文化や経済を支える地域であった。

そのような土地に、大正14年（1925年）4月、本校の始まりである黒石町立黒石実科女学校が誕生し、いくたびかの改称を経て、昭和23年4月、青森県立黒石高等学校（全日制課程設置）としてその歩みを始めた。また、ほぼ同時期に定時制課程中心校も併置され、その後、中南各地域に分校も誕生していった。しかし、時代の流れの中で、本校の分校は、昭和52年3月の六郷分校閉校を最後に、そして、定時制課程は、平成28年3月をもって閉課となったが、全日制課程及び定時制課程からは、多くの有為な人材を地域内外に輩出し、今日に至っている。

最後の運動会

本校について、もう少し詳しく述べたい。本校は開校以来、普通科設置校として歩みを始めているが、昭和44年（1969年）に衛生看護科が設置され、2つの学科を有する高校となった。現在に至る本校の土台であり特徴でもある。その後、英語科が平成6年に設置され、3学科を有する高校となった。残念ながら英語科は平成19年で歴史を閉じることとなったが、衛生看護科は平成14年から看護科へとその姿を変え、平成17年の専攻科看護科設置を受けて、北東北（青森・秋田・岩手の3県）公立高校唯一の5年一貫教育校として、幅広い地域から生徒を迎え入れ、地元はもとより、県内外に1，700名以上の看護医療従事者を輩出している。

昨年令和2年4月、中南地区統合校として名称は変わらない、「黒石高等学校」が開校された。現在、2つの「本校」が存在するのだが、新しい本校には情報デザイン科という新たな色が加わり、3学科と専攻科看護科を有する高校へと変化を遂げている。そして、今年度末90有余年にわたる歴史の幕を閉じる昭和設置の「黒高」から、新しい「黒高」へとそのバトンは引き継がれていく。

終わりは、次なる一歩の始まりとも言う。心根のあたたかい生徒たちとともに、地域とのつながりを太く、そして発信力を高めながら、黒高はこれからも進んでいく。

（校長　長内　秀文）

『御礼　中里高校』

中里高等学校

創立以来今日まで中里高校にいただきました皆様からの御恩と御支援に対し、心から御礼申し上げます。

本校は11月2日に閉校式を無事開催し、閉校まで残り半年ですが、10名の生徒の希望進路の達成に向けて、今全力で指導しているところです。

改めて、学校がなくなるということは、本当に悲しい気持ちで一杯となります。これまでに閉校してきた校長先生方のお気持ちを慮るばかりです。学校に対する思いが深まれば深まるほど、無念さが募るばかりです。教頭として市浦分校を、校長として中里高校を閉めることは、私の人生のハイライトであります。北津軽にどんな形であれ、いつの日か、高校が再び創られることを心の底から祈るばかりです。

中里高校は来年3月31日をもって46年の歴史を閉じます。これからは、皆様の心の中の青森県立中里高等学校として、永遠に生き続けることとなります。

これからの半世紀、中里高校の真価が問われることとなります。地域に根ざした卒業生がどれほど活躍できるのか、真価が問われるのです。

3，500名を超える卒業生と最後の10名の生徒こそが、中里高校が北津軽の地に存在した証であり、私達全ての教職員の誇りに違いありません。これまでも、そして、これからも、中里高校の卒業生であることを誇りに、ふるさとを愛し社会で一層活躍されることを祈るばかりであります。

最後に、これまでの46年にわたり青森県高等学校ＰＴＡ連合会からいただきました御支援に対しまして、心から御礼申し上げますとともに、貴会の更なる発展を祈念しまして、本校からの最後の挨拶といたします。ありがとうございました。

（校長　白濱　卯）

全生徒・職員　桜の木の下で

緑輝く学び舎に44年の感謝を込めて

田子高等学校

本校は、昭和27年に三戸高等学校田子分校として開校しました。その後、昭和53年に独立昇格し、郡部校と市部校との教育格差を縮めるべく、町とともに教育活動を続け、町の教育・文化向上の一端を担ってきたつもりです。普通科における国際教養コースの設置、県内初の連携型中高一貫教育の導入などがその一例です。部活動では伝統芸能を伝承する郷土芸能部が全国高等学校総合文化祭で最優秀賞・文部科学大臣賞を受賞するなど輝かしい足跡を残してきました。

ここ2年間は1学年ずつ減り、さらにコロナ禍での行動制限の中、少人数だからこそできることを模索し、工夫を凝らして学校行事を行ってきました。文化祭では地元食材を使った料理コンテスト、町の文化祭への参加・出店など、学校が地域と一体になって行う活動の醍醐味を最後まで味わうことができました。また、中里高校との交流会を2年連続で行い、閉校という共通項でつながりを持つことができました。

閉校式典

令和3年10月30日、地域の教育関係者の皆様、旧職員、後援会、同窓会など約200名の参列のもと閉校式が行なわれました。コロナ感染症予防対策のため、式後に予定していた「タプコピア敬愛の会」は中止といたしました。懐しい方々と話す時間が十分とれず、残念だったというお言葉を多数いただき、本校への惜別の想いを果たせず申し訳なく感じています。敬愛の会にかわるお弁当や記念品など当日お渡ししたものは、すべて田子町由来で卒業生の手によるものでした。特にお弁当には総合文化部が「ご当地絶品　うまいもん甲子園」（昨年は東北大会、今年は全国大会）に出場した時のメニューも含まれていました。田子町の高校であったことを誇りに、最後まで町に恩返ししたいというコンセプトで作ったメニューでした。また、同窓会の皆さんが当日、校門までの道路にプランターのお花を飾ってくれました。

こうして惜しまれる中、令和4年3月31日に44年の幕を閉じます。分校設立から数えて70年。これまで、本校に携わってくださったすべての皆様に心より感謝申し上げます。

（校長　小野　淳美）

「地域に支えられ93年」

五戸高等学校

本校は、昭和3年4月に五戸町立五戸実業公民学校として開校し、その後の変遷を経て、昭和26年1月1日県立移管となり、青森県立五戸高等学校と改称し、今日に至っており、今年度で93年目を迎えました。

昭和25年に現在の地に移転しましたが、新装成ったばかりの校舎の周囲は田畑のみで一本の樹木も無かったそうです。樹木と草花のうるおいを求めた五高健児とその保護者の方々は、自らの手でプラタナスを植樹し、環境を整えていきました。現在も、当時植樹されたプラタナスが、静かにしかも脈々と往時の歴史を伝えています。生徒会誌もプラタナスとして毎年発行されています。

本校は、昭和24年に定められた「自主、自律、協同」の三綱領と十訓の精神を礎とし11，845名もの卒業生を世に送り出しています。

教育理念のひとつは、地域に根ざした地域に必要とされる高校としての使命を果たすということです。地域の特色を生かした体験学習、地域の幼稚園や保育園、小・中学校との交流等、地域との連携から得られる、生徒の成長の証は、まさに地域の教育力の賜物です。創立80周年から始まった五戸まつりへの参加は、地域の方々との結びつきを強固なものとするとともに、伝統の継承にも貢献できたと思います。

部活動においても数々の活躍を見せております。特にサッカー部は、これまで全国大会に数多く出場し、昭和61年1月の全国高等学校サッカー選手権大会はベスト8でした。単独チームとして最後の年だった昨年は、五戸ひばり野公園サッカー場等で行われた試合に多くの方が応援に駆け付けてくださいました。

朝の一声運動

春と秋に各3日間行われるPTA主催の「朝の一声運動」も毎年多くの保護者の方に参加していただき10月に無事終わりました。

本校がこの輝かしい歴史を閉じても、かけがえのない青春時代を共に過ごした仲間達との絆は、いつまでも卒業生の心に生き続けるものと祈念しております。

（校長　清川　和幸）

頑張っています 我が部活

「挑み続ける」

青森南高等学校

今となってはもう遠い記憶の出来事である。本校女子サッカー部が最も耀いた時の物語を綴ってみたい。第28回全日本高等学校女子サッカー選手権青森大会を思い起こす。時は令和元年9月16日。

・・・・・

歓喜の瞬間は延長後半終了間際に訪れた。完全に相手チームのペースで進んだ試合は0対0のまま延長後半を迎えていた。9連覇を目指す優勝候補筆頭校の波状攻撃に耐え、数少ないチャンスを狙うのはチャレンジすべきチームの宿命であり常套手段である。忘れてはならないのは果敢にボールに挑み続けること。もはや誰もが疲れ果てていた。だが、その時が来た。相手チームからボールを奪ったフォワードNはやや遠めの位置から果敢に右足を振り抜く。美しい弧を描いたボールはまるでコマ送りのようにゆっくりとゴール右隅に吸い込まれる。

一瞬、時が止まった・・・

ビューティフルゴール！

チームの大黒柱、スペシャル1の会心の一撃が勝利をたぐり寄せる。この瞬間のために練習してきたのだ。経験者がほんの数名しかいない女子サッカー部は夢にまで見た栄冠を手に入れた。参加校が6校の言ってみればマイナーな種目の女子サッカー。それでもこれを勝ち取るまでにどれほどの努力を要したことか。コーチ陣の涙がすべてを物語る。

・・・・・

あれから二年が過ぎた。今は他の高校のチームに違わず本校女子サッカー部も部員不足に悩む。11人揃うことなく参加する大会も増えた。如何せん生徒数自体が減っているのだ。勝利どうこうよりもまずはチームを存続させることが優先される状況にある。ただ、人数は少ないが魂はあの頃のままだ。世代が変わっても選手が替わっても本校女子サッカー部の魂は変わらない。

一、試合に出られることを当たり前に思うな

一、楽しく厳しい練習を

一、全員で雰囲気作り

一、決して排除するな

一、一日一日を大切に

守るべき礼節と挑み続ける心は未来へと受け継がれて行く。

（女子サッカー部顧問　H）

「出会いを大切に」

弘前南高等学校

スマホの普及により誰もが常にカメラを携帯し、キレイな写真を簡単に撮ることができるようになった。写真が身近なものとなった、いまどきの写真部は女子生徒が圧倒的多数を占め、部員のほとんどは自分のカメラを持っていない。部員には入部後すぐにデジタル一眼レフカメラを貸出し、好きなものを好きなように撮ってくるように指示する。入部して間もない部員の目線から撮った写真は風景写真などが多数を占め、どの写真もおとなしい行儀のよいものばかりで、高校生らしい自由な発想や感性はそこにはない。「何をどのように撮ればよいのか」様々な写真を参考のために紹介するがそこに明確な答えは存在しない。なぜなら、本当の答えは自分自身が数多くの写真を撮ることによってしか見えてこないからである。部員は「何をどのように撮ればよいのか」悩み、南高写真部員としての一歩を踏み出す。

部では一年間の活動の中でも「県高校総合文化祭」と「写真甲子園」を中心に据えて活動している。

5年前から県高校総合文化祭写真部門において「学校賞」に入賞できるようになった。この賞は入賞作品を点数化して他校と競うもので出品作品の量、質ともに高い評価をされた結果と考えている。また、県代表として全国高校総合文化祭へ出場する機会も多くなった。全国の素敵な作品や現地の人々、まだ見ぬ光景との出会いは、部員にとって次回作品制作の原動力となっている。

北海道東川町主催の写真甲子園は肉体的・精神的にハードな写真大会であるが、多くの出会いを提供してくれる大会でもある。部員たちは夏の北海道を駆けめぐり、チームワークの大切さや様々な出会いを経験する。写真甲子園から贈られた「出会い」は間違いなく3年間の部活動の中で最高の思い出となっているはずである。

部員には写真を撮ることを卒業しても続けてもらいたい。写真を撮るという行為は多くの場合、人との出会いであり、写真を撮ることで一生出会うことがなかったであろう人と向きあう機会ができる。人との出会いこそが、私たちを成長させてくれる。その出会いを大切にしてほしい。

（写真部顧問　今井　尚一）

編集後記

私の周囲では、研修会や会議の開催において、リモート、リモートと現地開催を合わせたハイブリッド型の開催スタイルがすっかり定着してきた様に感じます。（それに比べ、リモート飲み会はあまり聞きませんが。）会場での開催に比べてメリット・デメリットはあると思いますが、開催に向けて、方法を模索しながら進めていく事はとても大変な事だと思います。昨年は今季の「つながり」は諸事情により休刊となりましたが、今年は皆様のご協力のお陰で、何とか発行出来た事をうれしく思います。ありがとうございました。

（調査広報委員長　竹村　智美）

一般財団法人 青森県高等学校安全互助会

安全互助会だより

57号
2021.12.14

―― 明るく　強く　逞しく ――

共済掛金は来年度も同じです。

全日制（専攻科を含む）　６００円
定時制・特別支援学校　２５０円
通信制　１００円

令和３年度　上半期事業費支出内訳

令和３年４月１日～令和３年９月30日

◆ 事業費　3,254,983円（予算額　9,901,000円）

1　学校安全普及充実事業費　600,000円

(1)	８月11日　助成金支出（地区協議会　安全教育活動費）	300,000円
(2)	８月11日　助成金支出（青森県高等学校体育連盟）	100,000円
(3)	８月11日　助成金支出（青森県高等学校文化連盟）	100,000円
(4)	８月11日　助成金支出（青森県高Ｐ連安全教育活動費）	100,000円

2　共済金等給付事業費　2,589,896円

(1)	死亡共済金	０件	0円
(2)	後遺障害共済金	０件	0円
(3)	負傷共済金	130件	2,539,896円
(4)	香料	１件	50,000円
	（前年度　１件）		

3　その他事業費　65,087円

(1)	７月19日　安全互助会だより56号	65,087円

◎ 青森県高等学校安全互助会加入生徒数

全日制26,966名　定時制・特別支援学校976名　通信制319名　総数　28,261名

令和３年度　上半期負傷種類別データ　（４月～９月支払い分）

負傷共済金支払金額　2,539,896円　　支払件数　130件

骨折	鼻	腰	足首	足	手・腕	顔	鎖骨	44
	4	9	6	6	16	1	2	
捻挫	肩	足	手	その他				13
		12		1				
脱臼	肩	膝	手・腕	足				6
	3	1	1	1				
打撲・挫傷	目	鼻	口	足	腰	手	頭	5
				1	1	1	2	
創傷								3
	3							
靱帯損傷・断裂	膝	肘	手	足				64
	52	5		7				
半月板損傷・断裂								25
	25							
腱損傷・断裂	指	アキレス腱	その他					5
		3	2					
歯牙破損								1
	1							
その他負傷		ヘルニア						19
	18	1						
								185